2014年4月8日
蔵前工業会 関西5支部 午餐会 講演
中央電気倶楽部

西行が辿った道
勝持寺から弘川寺まで

鶴田 隆雄　1967原修、1970原博

洛西の花の寺:勝持寺への参道

勝持寺の南門

勝持寺の境内:左が阿弥陀堂

勝持寺の境内：奥に不動堂

勝持寺境内の西行櫻

嵯峨野、二尊院の紅葉

二尊院の参道

二尊院参道横に立つ西行庵碑

嵯峨野に残る西行井戸

高野山、三味堂前の西行櫻

高野山のしだれ櫻

高野山の麓、天野の里

天野の里、西行堂

天野の里、西行堂に座す西行

天野･丹生都比売神社の輪橋と鏡池

奥吉野、西行庵への道

奥吉野の西行庵

奥吉野、西行庵に座す西行

奥吉野、西行庵近くの苔清水

大阪府南河内郡河南町の弘川寺

弘川寺の西行堂

西行堂から弘川寺の本堂を望む

弘川寺の西行墳

表1　西行の時代の年表（その1）

- 1118　佐藤義清誕生。璋子（待賢門院）が鳥羽天皇の中宮となる。
- 1119　佐藤義清（2歳）。璋子が顕仁（のちの崇徳天皇）を生む。
- 1135　佐藤義清（18歳）任官、のちに鳥羽院の北面の武士となる。
- 1140　佐藤義清（23歳）洛西の勝持寺に赴き、剃髪・出家し、東山、嵯峨野等洛外に草庵を結ぶ。僧、西行の誕生。
- 1142　西行（25歳）　待賢門院が法金剛院で落飾。
- 1144　西行（27歳）奥州への旅に出発。
- 1145　西行（28歳）　待賢門院没（45歳）。
- 1150　西行（32歳）高野山に入山。吉野に草庵を設ける。
- 1153　西行（36歳）厳島神社の参拝に出掛ける。
- 1156　西行（39歳）鳥羽上皇没、保元の乱。西行は仁和寺で剃髪した崇徳院の許に馳せ参じる。崇徳院は讃岐に配流。
- 1159　西行（42歳）　平治の乱。

表2　西行の時代の年表（その2）

- 1164　西行（47歳）　　崇徳院、讃岐にて没（46歳）
- 1167　西行（50歳）　　平清盛、太政大臣になる。
- 1168　西行（51歳）讃岐への旅。崇徳院の慰霊。弘法大師旧跡訪問。
- 1180　西行（63歳）高野山を離れ、伊勢・二見浦に草庵を結ぶ。
- 1181　西行（64歳）　　平清盛没（64歳）。
- 1185　西行（68歳）　　平氏、壇の浦で滅亡。
- 1186　西行（69歳）東大寺再建のための砂金の提供を藤原秀衛に頼むため奥州に赴く。途中、鎌倉で源頼朝に会う。
- 1187　西行（70歳）京都嵯峨に草庵を結ぶ。
- 1189　西行（72歳）河内の弘川寺に草庵を結ぶ。
  義経討たれ、奥州藤原氏滅亡。
- 1190　西行（73歳）弘川寺で入寂。

表3　西行の和歌（その1）

西行との出会い

- 心なき　身にもあはれは　知られけり　鴫立つ沢の秋の夕暮れ

保延6年(1140年)、洛西の花の寺：勝持寺で出家、東山や嵯峨野に草庵を結ぶ

- 惜しむとて　惜しまれぬべき　この世かは　身をすててこそ　身をも助けめ
- 鈴鹿山　憂き世をよそに　振り捨てて　いかになり行く　我が身なるらん
- 世の中を　捨てて捨てえぬ　心地して　都離れぬ　我が身なりけり
- 尋ぬとも　風のつてにも　聞かじかし　花と散りにし　君が行方を
- 嘆けとて　月やはものを　思はする　かこち顔なる　我が涙かな

久安6年(1150年)、高野山に赴き、また、吉野に草庵を結ぶ

- 今よりは　花見ん人に　伝えおかん　世をのがれつつ　山に住まんと
- さびしさに　耐えたる人の　またもあれな　庵並べん　冬の山里
- とくとくと　落つる岩間の　苔清水　汲み干すほども　なき住まいか
- 吉野山　梢の花を　見し日より　心は身にも　添わずなりにき
- 春ごとの　花に心を　なぐさめて　六十路あまりの　年を経にける

表4　西行の和歌（その2）

保元元年(1156年)、保元の乱、仁安3年(1168年)、讃岐への崇徳上皇慰霊の旅

- かかる世に　影も変らず　澄む月を　見る我が身さへ　恨めしきかな
- よしや君　昔の玉の　床（ゆか）とても　かからん後は　何にかはせん
- 松山の　波の景色は　変わらじを　形なく君は　なりましにけり
- ここをまた　我が住み憂くて　うかれなば　松はひとりに　ならんとすらん

治承4年（1180年）、伊勢・二見浦に草案を結び、伊勢神宮の神官と交流

- 何事の　おはしますかは　知らねども　かたじけなさに　涙こぼるる

文治2年(1186年)、2度目の奥州への旅（1度目は20代後半のとき）

- 年たけて　また越ゆべしと　思ひきや　いのちなりけり　さやの中山
- 風になびく　富士の煙の　空に消えて　行方も知らぬ　我が思いかな

文治5年（1189年）南河内の弘川寺に赴き、翌、建久元年旧暦2月16日に入寂

- 訪ね来つる　宿は木の葉に　埋もれて　煙を立つる　弘川の里
- 願はくは　花の下にて　春死なん　そのきさらぎの　望月のころ